



Title	研究会の感想
Author(s)	永山, 亜樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 33-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68179
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

研究会の感想

永山 亜樹

今回は、講演会の後に桂ノ口さんから頂いたご質問にお答えしながら、自分をさらに分析しようと思います。

——「この人ならば大丈夫な気がする」「この人は本気で向き合ってくれている」と感じる時は、どのような時ですか。

このように相手のことを見つめ始めたのは、少し遅いかもしれません。なぜかという、少なくとも、高校に入学をするまでは、人と深い関わりを持ちたい、誰かと一緒に行動したいという気持ちよりも、1人で活動したいと思っていたことが強くあったからだと思います。そしてもう1つ、白か黒、0か100で人を見てきた自分も思い出します。合わないこと(何組の男子がかっこいい、この服かわいいなど話題に興味を持たない、クラスの催しに熱心でついていけない、声が高くてしんどい、服装がにぎやかで目が疲れる)を目撃してしまうだけで、この人とは関われないと決めてしまっていました。人と関わる前に決めてしまうことがあり、人と話す前から、人との交わりを絶ってしまう自分がいたので、この人なら大丈夫など、深く人を見つめたことがありませんでした。

そのように過ごしてきたので、「この人ならば大丈夫な気がする」「この人は本気で向き合ってくれている」と強く感じ始めた(わかり始めた)のは、大学に入学して、人もまあ良いかなあと思えるようになったり、0と100の間を数字を許容でき始めた頃と重なると思います。なぜ、そのようなことができるようになったかという、心地よくもあり、自分を苦しめさえする0・100思考に永浜先生をはじめ、周りの人からアドバイスされる「適当」「力を抜く」という加減を学び始めたからだと思います。長い時間をかけて、0・100の

間に 90、50、60 と数字がはいるようになっていきました。自分の 0・100 思考に幅ができると、人に対しても、良い・悪いではなく、「こういうところもあるけど、こんなところもあるんだ!」と 1 つの見方にとらわれないことが増えていきました。こういう間（の数字）を知ることで、人には幅があり、自分にも幅があるということが分かっていきました。

自分の大事にしていることと相手が大事にしていることが交われれば、その人との関係が続くと思っています。相手が何を大事にしているかが分かるには、たくさんの時間がかかると思います。直感で大丈夫だと思うのは自分でも理由がよく分かりません。でも、この人とまた話をしてみたいなと思ったりすることや、その人の持っている柔らかさや強さ、不器用さに惹かれたりして、その人へ向かって矢印が生まれるのかもしれませんが。

「本気で向き合ってくれている」と感じる時は、かけ離れた未来ではなく、かと言って現状に浸る訳でもなく、一歩先のことを丁寧に話ができる時かなと思っています。

——「写真を見てかくときは、目を目と思わずにここは黒だなというふうにかいている」とおっしゃっていたと思います。それは、写真の場合は「形」ではなく、「色」で捉えているということでしょうか。

写真を見て描くときは「形」も「色」も見えています。単に見ている時は、写真をボーッと眺める時のように、木があって、車が走っていて、遠くにビルがある「名詞」が浮かぶのですが、描いているときは、それが全くなくなってしまいます。ビルという認識がなくなり、縦の線 2 つ、横の線 1 つ、中に四角がいっぱいと言葉になる前に形に置き換えられています。

——普段あじゅさんは世界のどんなものを見て過ごされていると思いますか。

みなさんと見えているものは同じだと思いますが、規則正しいものや、一定に動くものを見ていることが多いかもしれません。例えば、信号待ちをしている時に車のタイヤをながめたり、ビルの窓の数を数えたりしています。電車がホームに入ってくる時に、窓が規則正しく並んでやってくるのを眺めたりもしています。

人も含めてそうですが、不規則に動きが変わるものや、曲線の形などに違和感を感じることがあり、よく見れていないことがあるとおもいます。でも、今回の旅（58 日かけて東京から堺まで歩きました）でそのようなことがなくなっていくかもしれないと思い始めています。

他には、テレビドラマなどを観ていると、背景に気を取られて、続いていくストーリーについていけなくなり、なぜ犯人が逮捕されたのか分からなくなっていることがあります。似ている感覚としては、人の話を聞く時も、視界に気を取られて、話を聞けていない時があります。

——イラストと絵の違いについて、教えていただけませんか。

芸術でいうイラストと絵の違いなどはわかっていませんが、今回発表したスライドで使用したものを「イラスト」、そうではなく、普段時間をかけて描いているものを「絵」として、描いていきたいと思います。

イラストは思い出しながら描いています。思い出しながら描く時には、次々シーンが見えてくるので、描くスピードが速くないと、何ヶ月もかかってしまうと思います。沖縄の報告会では 100 枚、今回は 70 枚のイラストを描きました。どれも中心となるのは、人だったので、ここで人や人の動きを描きはじめました。普段も人に焦点を当てて絵を描いたことがないので、これを見た人は、とてもギャップを感じるのではないかと思います。

このイラストは、すぐに言葉が出てこない（文章化するのに非常

に時間がかかる)ので、言葉よりも先に出てくる映像(シーン)を描き留めて、文章にするための資料のような役割です。

絵は写真を見ながら描いています。丁寧に時間をかけながら描いています。形や色を詳しく見ながら描いています。また、描きたいと思う、ビルや乗り物を描いています。

——ポスターのデザインの時などは、どこをとっかかりにして、どのように(どこにどんなものを置かや、どこに文字を配置するかなど、どんなふうに考えて作っていらっしゃるのか)作業を進めているのですか。

ポスター制作のときは、主にタイトルや講演内容からイメージをつくりまします。今回(※文末に掲載)は、哲学対話と当事者研究ということで、主に当事者研究からイメージしたものでつくりました。自己を分析するという意味で、自己を拡大するイメージから、虫眼鏡を連想させ、「当」という字を虫眼鏡で覗いているようにするといひかな。また、自分を研究するということは、自分を知っているように知らないことなのかなと思い始め、そのままを写し取る写真を載せるよりも、自分のようだけど、自分でないような似顔絵が、イメージに合うと思いました。言葉から形やものを想像しています。このように、イメージが湧いてから、パソコンに向かひまします。配置などは、きれひな形におさまるようにレイアウトしまします。時々、形(レイアウト)ばかりを意識しすぎて、日付や時間帯が小さくなってしまうこともあります。なので、形も大事だけれど、情報がすぐに目に入るようにどのように配置するかなど、まだ試行錯誤しています。

——なぜ言葉にしたくなるのでしょうか。

私は、それこそ大学に入ってから、言葉に興味をもったことがありません。なので、今でも、ことわざやこの年齢で知っているは

ずの言葉にも???となってしまいます。

YES と NO と嬉しい、悲しい、怒っている、楽しい、と数字があれば十分だと幼い時から思っていました。

それに大きな変化をもたらしたのは、これも大学に入ってからです。自分がどうしたいのか、何を伝えたいのか、気持ちを相手に伝えたいと思えば思うほど、悲しいや嬉しいという言葉が、なんてアバウトで自分の心情に寄り添っていないのだらうと思い始めました。私の場合は、きちんと伝えたいと思った人がいたこと、また、自分の中で感じていること、思っていることを、ただ誰かが言っている言葉をなぞるのではなくて、自分の言葉で正確に表したいと思ったことが、言葉にしなくなった動機だと思います。

——**絵という言葉で表現をしたとき、返事を感じますか。**

自分から自分への返事は感じません。それは、そのときに描きたいものを描いているだけからかもしれません。ただ、自分の絵を見返すと、その時にどのような心情だったか、どのような出来事があったか思い出します。以前の絵と、現在の絵を見た時に、思い出話を頭の中ですることはあります。

自分の絵を見たときは、メッセージを感じるのではなく、その時の心情を思い出します。

何よりも言葉でもややも説明するよりも、絵で描いた方が、そのときの気持ちを乗せられる、伝えられる 1 番の自己表現、相手への伝達方法と思っています。

また、自分ではない人が描いた絵には、返事ではないけれども、何を思ってこの絵を描いたのか、なぜその題材なのか、どうしてそんなに筆使いが豪快なのか、どうしてその場所に明るい色を置いたのかなど、その人や背景にあるものが何なのか知りたくなります。

——他の人から、自分自身の絵への返事を感じたことがありますか。

今は見たものや好きな絵を描いていますが、しんどい時期に電車がまっぴたつに折れて、崖から落ちそうになり、はたまた隕石が向かってくるといふ絵をスケッチブックに描いたことがあります。

それは、永浜先生、永浜先生のお母さんとやりとりしていた交換日記で描きました。そのときは苦しさや、しんどさ、悲しさ、辛さを声に出すことが出来ず、言葉にすることもできませんでした。その絵に対して、言葉で返事はなかったと思います。その当時はどうして、返事がなくて、話がそれた内容なんだろうと思っていました。今、この話を永浜先生先生としていますが、絵や言葉では返事をしていないけれども、あなたの絵から受け取ったことを、態度や接し方であなたに表現していたんじゃないのかな。と話してくれました。今ようやく気付きました。返事を感じたのはこの1度だと思います。

これらの質問に対する、自分の考えていることがまたみなさんの何か役に立てれば嬉しいです。感想に代えて。

(ながやまあじゅ)



当事者と哲学 研究と対話



基調：永山亜樹 (大阪大学教授)



基調：中川直也 (元大阪大学教授)



永山亜樹 (1st 登壇者)

「共歩と私らしさ」

(発達障がい当事者、元東大・日本財団
「真才実能プロジェクト ROCKET」特別スカラー)



石原孝二 (東京大学准教授)

「当事者研究とオープンダイアログ」

基調講演

松前香里 (2nd 登壇者)

「日常の中の治療的対話をめざして」

(NPO 法人虹のかけはし障がい福祉サービス事業所大地・
相談支援事業所空(そら)、相談支援専門員)



稲原美苗 (3rd 登壇者)

「哲学対話における現象学的アプローチ」

(神戸大学准教授)

illustrated by Aju

第40回
臨床哲学
研究会

2017.3.21
TUE

13:00

17:30

at

大阪大学豊中キャンパス
基礎工学部1棟
オレンジシヨップ